

4. 子どもたちがイキイキする活動づくり

(1) 成長・発達段階に応じた活動企画づくり

子どもたちの認識発達は、年齢が上がるにつれて具体的な事柄を通じた理解から抽象的な法則性や一般化への理解へと推移します。体験の内容も、身体を使った感性や情緒に訴える具体的な体験から、抽象的な分析や思考をともなう体験へと変化していきます。

◆小学校低学年の場合

小学校の低学年では、土や動植物とのふれあいや観察など、本物にふれる直接体験を中心にすることが大切です。やりたいこととできることがまだ、未分化な状態にある時期ですが、可能な限りやってみたいという気持ちを尊重する必要があります。

〔活動例〕 動物や農作物とのふれあい・どろんこ遊び

◆小学校高学年の場合

高学年になると農業の歴史的な事柄や農業を取り巻く環境、地域社会の動きに関心を膨らませる活動へのウェイトが高まります。この時期は、子どもたちの生活（行動）空間が飛躍的に広がります。自分の力を試してみたいという気持ちを活かした成功体験が大きな自信につながります。

〔活動例〕 農作物（米・野菜・大豆等）の栽培、農作物の加工・販売、動物の世話

◆中学校の場合

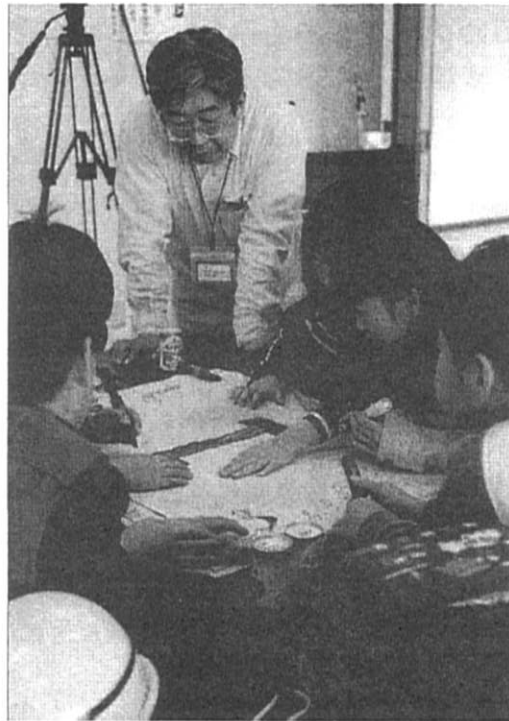
中学校においては、今日における日本の農業や地域社会にとって、自分たちに何ができるのかを思考し、その具体的な手だてを考え、実行していく活動への発展の機会が必要になります。学んだことを下の学年に伝える、考えたことを実際に自らの生活で活用するなどの活動が想定されます。

〔活動例〕 地域の農業を体験、課題や取り組みの方向性をグループで調べる、地域で発表

(2) 一人一人の関心・意欲を活かすグループ活動の導入

体験的な活動や問題解決的な学習を重視し、子どもたちの主体的な活動を促す「総合的な学習の時間」などでは、子どもたち一人一人の関心や意欲を活動に反映させる方法論として、従来の集団・個人の2分法による活動だけでなく、中小のグループ（班）活動を取り入れるケースが増えています。

また、活動グループの形成において、関心のあるテーマ毎別のグループ分け（目的別組織づくり）など、それぞれの子どもたちの関心が活かされ集団の意見を形成するような活動形態の工夫も子どもたち一人一人の関心・意欲を活かした活動とする上で有効な手段となります（近年、住民参画を取り入れたまちづくりや集団表現を対象とする芸術分野等において行われている「ワークショップ」などにおいても、こうした手法が盛んに取り入れられています）。



JA北信州みゆき「あぐりスクール」
グループワークによる班（グループ）の旗づくり

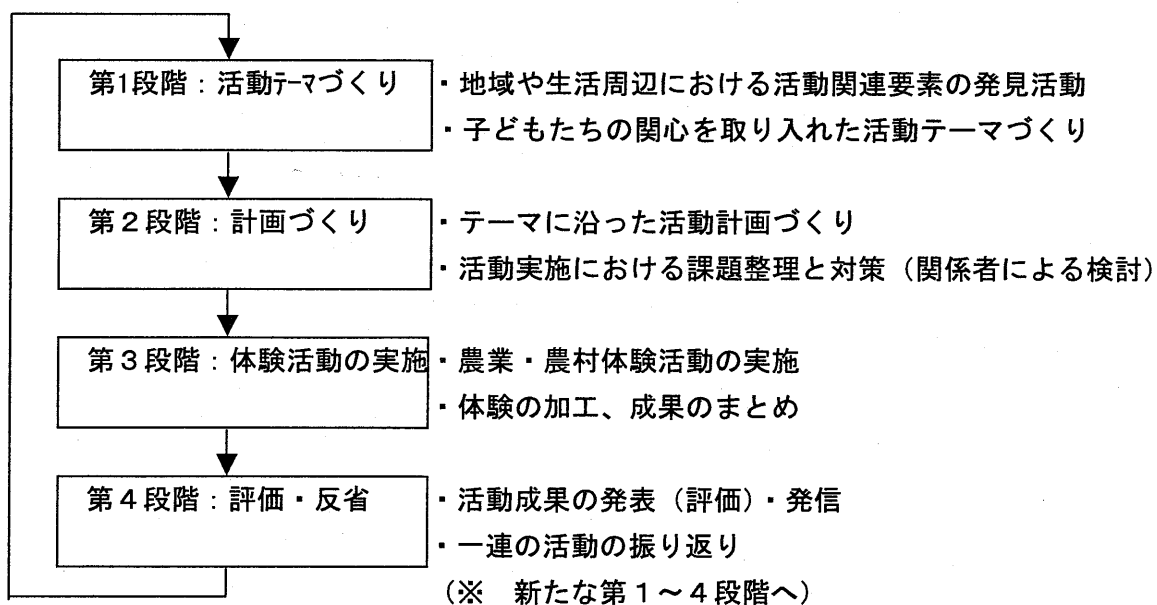
(3) 事前・事後学習を取り入れた農業・農村体験活動づくり

子どもたちが主体的に取り組む体験学習とする上で、下図の4段階の流れが基本となります。その際、体験活動の前段となる部分を事前学習、体験の後段の部分を事後学習と位置づけます。事前学習では、子どもたちの関心が体験に結びつくような流れ、事後学習では体験が子どもたちのものとして定着するような流れが大切です。

事前学習としてよく行われるのは、これから行う体験活動に関して子どもたちが事前に調べる「調べ学習」です。子どもたちの関心に沿ったサブテーマを設定してグループで活動したり、地域の関係者に直接聞きに出かけるケースもあります。また、子どもたちが事前学習を通して関心を持った方向に沿って体験の内容（企画）をアレンジし、子どもたちの関心を一層、反映させた活動とするケースもあります。

事後学習としては、体験をもとに壁新聞やニュースレターを作成するなど、「体験の加工」に取り組むケースが多くみられます。子どもたちは、体験を振り返りながら、まとめ、表現することで、自らの体験を自分の中により深い形で定着させることが可能となります。

加えて、子どもたちが自らの体験を地域の支援者の前で発表し、成果を伝えることで、地域の支援者側も自らが取り組んだ評価を得ることができ、次の活動につなげていくことができます。



(4) 子どもたちの中で「食」と「農」が会う

「農」のある暮らしの魅力を伝えたい・・・

「スーパーや商店で購入する食材が、どこでどのようにつくられているのか知らない。」

現在、消費者の中で「食」と「農」の距離が拡大していることが、品質や安全性重視ではなく、見かけの美しさを農産物の購入基準とすることにつながるといった問題を生みだしています。当然のことながら、学校給食や家庭における食事の素材の出所を知らない子どもも大半を占めます。

こうした中、学校給食に地元農産物を活用し、栄養士がその食材について説明したり、子どもたちが農業体験として育てた農産物を給食に使うといった「食」と「農」の距離を埋める取り組みが増えています。その結果、給食で出る残菜が減った、子どもたちの好き嫌いが減ったといった成果が数多く報告されています。

子どもたちの農業・農村体験において、子どもたちがイキイキとした活動にするポイントは、こうした「食」と「農」を近づける取り組みをはじめ、「産業」と「暮らし」の距離が接近していた近代以前の農家の暮らしに学ぶことが少なくありません。そこには近代化、分業化によって切り捨てられてきた、暮らし+仕事（生業）の総合的な姿があるからです。日本テレビの人気番組「ザ・鉄腕ダッシュ」では、暮らしと仕事が接近した「農」的な暮らしの魅力が余すところ無く描かれています。

現在の農業の姿を子どもたちに伝える一方で、こうした「暮らし」としての「農」の魅力を大人側も再発見しながら、活動に取り入れることが不可欠です。



栄養士さんが給食に使った地元の食材について説明
(高知県南国市)